

札幌医科大学オープンキャンパスの現状と展開

三瀬 敬治¹⁾、旗手 俊彦¹⁾、杉山 厚子²⁾、小林 宣道³⁾、二宮 孝文³⁾、
木村 康利³⁾、明石 浩史⁴⁾、小塚 直樹²⁾、坂上 真理²⁾、石川 朗²⁾、
田中 豪一¹⁾、傳野 隆一¹⁾

¹⁾ 札幌医科大学医療人育成センター

²⁾ 札幌医科大学保健医療学部

³⁾ 札幌医科大学医学部

⁴⁾ 札幌医科大学附属総合情報センター

Open days of the Sapporo Medical University for high school students

Keiji MISE¹⁾, Toshihiko HATATE¹⁾, Atsuko SUGIYAMA²⁾, Nobumichi KOBAYASHI³⁾, Takafumi NINOMIYA³⁾,
Yasutoshi KIMURA³⁾, Hirofumi AKASHI⁴⁾, Naoki KOZUKA²⁾, Mari SAKAUE²⁾, Akira ISHIKAWA²⁾,
Gohichi TANAKA¹⁾ and Ryuichi DENNO¹⁾

¹⁾ Medical Education Center, Sapporo Medical University

²⁾ School of Health Sciences, Sapporo Medical University

³⁾ School of Medicine, Sapporo Medical University

⁴⁾ Sapporo Medical University Scholarly Communication Center

2009年度札幌医科大学においてオープンキャンパスが、医学部は8月4日、保健医療学部は8月5日と8日に実施された。高校別に見ると、ほとんどが道内高校生または既卒者であり、両学部とも約半数が高校2年生である。医学部と保健医療学部ではプログラムや募集人員などに違いがあり、それぞれに工夫をしているが、アンケート結果などから全体として、特に「在校生からの声」が好評であった。入学後アンケートでは両学部とも、入学者中に占めるオープンキャンパス参加経験者が高く、オープンキャンパスが、入学後の学生生活や勉学に関するイメージを構成する役割も担っていることがわかる。

参加者の多くがインターネットで情報を得ていることから、今後、開催時期の工夫やプログラムの吟味などに加え、より適切な情報提供を進めていく必要がある。

1 はじめに

オープンキャンパスは、入試広報活動の一環として位置づけられるとの認識の下に、医学部、保健医療学部の両入学者選抜委員会内に、オープンキャンパス実施小委員会を組織し、この小委員会が企画、事前準備、当日の運営等の業務を担当している。

また入学者選抜企画研究部門は札幌医科大学医療人育成センターの他部門と同様に2008年10月に設立された。本部門では、本学の理念に沿った入学者選抜を行なう事とともに、本学の入学者選抜の基本理念・アドミッションポリシーを高校並びに社会に広く浸透させていくための具体的方法を研究し、実施すること

が、活動指針の大きな柱となっており、オープンキャンパスはその業務の重要な一部である。

本報告では、本学におけるオープンキャンパスの現状をまとめ、今後の展開を考察する。

2 札幌医科大学オープンキャンパスの概要

札幌医科大学では医学部と保健医療学部の二つの学部を持つが、オープンキャンパスの試みは2001年度に、まず保健医療学部で行われ、翌2002年度から同じ医学部でも始まり同時日程で行われてきた。さらに2008年以降、医学部と保健医療学部がそれぞれ独自に企画運営を行ってきた。2009年度は医学部が8月4日、保健医療学部が8月5日と8日に実施された。

両学部は参加者の募集方法も異なっている。医学部では2009年度から申し込み先着200名で締切り、保健医療学部では、事前申し込みを必要とするものの定員は設けず、申込者は全員参加を許可している。医学部では申し込みをせずに当日参加を希望する者には、参加できるプログラムに一部制限を加えて参加を認めたが、当日欠席者数と差し引きして、予定通りの200名が参加となった。一方、保健医療学部では、両開催日で同数の239名が参加申し込みをした。

高校別に見ると、医学部では95%が道内高校生または既卒者であり、保健医療学部では99%が道内高校生または既卒者であった。

両学部とも約半数が高校2年生である。この比率は医学部の方がやや高い。

プログラムの詳細は各学部の報告に記述するが、医学部は講堂における全体での学部紹介や模擬講義をメインとして、その後に大学施設の見学を行う方式をとっている。それに対して保健医療学部は、学部校舎内で学科ごとに展示、体験コーナー、模擬講義などを行い、参加者達にはそれらを自由に、学部内を見学させる方式をとっている。

これによって、医学部は医学科のみの学部であり、保健医療学部は看護学科、理学療法学科、作業療法学科の三学科が存在する学部であるという違いをうまく特徴づけている。医学部では学部そのものの印象をはっきりさせることに重点を置き、一方の保健医療学部では体験型のプログラムを中心に、学部学科のイメージを理解させ、さらに様々な学科の様子を知る機会を与えている。

オープンキャンパス参加者に対してはアンケート調査を行い、参加者からのフィードバックを得ている。アンケートでは、参加者の性別、学年、高校などの情報の他、本学のオープンキャンパスを知ったきっかけ、開催時期や開始時刻、終了時刻、等の妥当性、さらに他大学オープンキャンパスへの参加状況の他、各プログラムへの評価を設問としている。

3 医学部オープンキャンパス

現在、18歳人口の急減に伴い、ほぼすべての大学で、志願者確保を主たる目的としてオープンキャンパスを実施している。他方、医学・医療系の大学・学部のオープンキャンパスにおいては、教育内容や卒業後に取得する資格が限定されていることから、入学後の大学・学生間のミスマッチを防ぐという役割も、決して見逃すわけにはいかない。このような経緯から、医学部も2002年度よりオープンキャンパスを実施している。

また、医学部に特有の状況として、医師不足対策

としての地域枠の新設が挙げられる。全国的な医師不足/医師偏在の解決策として、全国的な取り組みおよび北海道地域医療対策協議会と協働して、札幌医科大学では、卒業後に一定期間北海道での地域医療に従事することを義務付ける特別推薦選抜枠を新設した。この特別推薦選抜により入学した学生には、北海道から6年間の在学期間に奨学金を貸与される。これにより、従来の定員100名に加え、2008年度入試では10名、平成21年度入試からは15名を特別推薦枠に充てている。この結果、2009年度入学生の定員は115名となる。特別推薦選抜枠は、今後しばらく15名を充てる予定である。この特別推薦選抜枠の趣旨の周知を図ることも、医学部オープンキャンパスの重要な役割である。

3-1. 医学部オープンキャンパスの内容

(1) 開催時期

医学部オープンキャンパスは、1年に1回、例年8月第1火曜日の午後に開催している。2009年度は8月4日に実施された。この日程は、主として北海道大学のオープンキャンパスとの連続性を確保するという観点から設定されている。すなわち、北海道医学部と本学部との志願者層が一部分重なり合っていることから、北海道外や北海道の地方都市からの志願者が北海道大学医学部と本学部との両方のオープンキャンパスに参加できるように開催日時が設定されているのである。例年、北大医学部に北大オープンキャンパスの日程を確認の上、本学部オープンキャンパスの日時を決定している。

(2) プログラム

オープンキャンパス開始から数年は、両学部合同プログラムの時間帯を設けてきた。

その後、2007年度からは別プログラムが編成されている。札幌医科大学医学部のプログラムの特徴は、学生、研修医という若い世代が大きな役割を担っている点に存在する。医学部長からの学部説明や他の教員による模擬講義は、他大学医学部でもいわば定番メニューとして実施されている。これに加えて、本学部のオープンキャンパスでは、2005年度より学生プレゼンテーションを、2007年度からは（後期）研修医によるプレゼンテーションも併せて実施している。医学部入学後は、医師になる前に必ず6年間の学生生活を経ることになり、その学生生活のプレゼンテーションは、部活や学生間の交流など、医師国家試験受験資格の取得にはとどまらない医学部の学生生活の魅力を余すところなく伝えている。また、研修医は、受験生と最も年齢の近い医師であり、その身近さ故に、自分の近い将来像を研修医に重ね合わせる参加者も多い。

表1：平成14年度から平成21年度における医学部オープンキャンパス参加状況の推移

ただし、平成21年度は定員を先着200名に限定。平成21年度は当日欠席者数6名、当日参加者数6名を含む。

年度	当日参加者数(人)
平成14年度	155
平成15年度	163
平成16年度	159
平成17年度	198
平成18年度	241
平成19年度	264
平成20年度	306
平成21年度	200

学生および研修医によるプレゼンテーションは、オープンキャンパス参加者のモチベーションを大いに高めてくれている。

全体企画の他、その前には、地域医療総合医学講座の担当により、特別推薦選抜に関する個別説明会を開催している。また全体企画の後には、教員、学生、研修医による個別相談会も開催している。

(3) 参加者数

2002年度の開催依頼、参加者は増加の一途をたどっている(表1)。アンケート調査からも、キャンパス見学に際してグループの人数が多過ぎることに起因する難点も指摘されるようになってきたため、2009年度からは、先着200名という定員枠を設定している。男女比はほぼ1:1である。

3-2. 医学部アンケート集計結果

(1) 当日アンケート

2009年度のオープンキャンパス参加者への、アンケート回収率は90%である。本学のオープンキャンパスを知ったきっかけは、約半数がインターネットからであり、高校での掲示や先生からの紹介が、それに続いていた。各プログラムに対する評価の集計結果を図1に示す。全体として、参加者の満足度は非常に高いと言えよう。

(2) 入学後アンケート

医学部では、毎年、入学生を対象に試験問題や入試広報活動に関するアンケート調査を実施している。このうち、オープンキャンパスの参加の有無を問う質問項目には、毎年40名前後の学生が参加と回答している(図2)。この結果から、オープンキャンパスは、志願者層の内の合格圏内の層に参加してもらえていることが分かる。ここから、オープンキャンパスは、入

学後の学生生活や勉学に関するイメージを構成する役割も担っており、入学後の学生生活のオリエンテーションという効果ももたらしている。

3-3. 考察

冒頭でも述べたとおり、18歳人口の急減は、大学の志願者確保に大きな影を落としている。一定の競争倍率を確保できなかった場合には、入学後の就学に支障をきたすことがすでに知られている。18歳人口は、平成に入ってから、1992年に205万人でピークを迎えた後に急減し、2009年には121万人になっている¹⁾。1992年を100とすると、2009年は59となり、4割もの減少となっている。これに対して、本学部の志願者数は、1992年の603人から2009年の528人まで減少しているが、やはり1992年を100とすると、2009年は87.6という値にとどまっている。この数字は、オープンキャンパスを中心とする入試広報活動が、志願者確保という期待された成果を上げていることを物語っている。

他方、2009年度から導入した参加定員枠が受付開始からほんのわずかの期間で埋まってしまったことに照らしても、オープンキャンパスの参加者数を増加させることはもはや目的として設定する必要がない段階に達している。入学者に占めるオープンキャンパス参加者の多さも考慮に加えると、オープンキャンパスは、志願者確保というよりも、高大連携という役割を担うイベントに性格を変えてきていると判断しえよう。今後の医学部オープンキャンパスは、参加者の職業的適性を見極める機会として、また本学部入学後の勉学および学生生活をより満足の行くものにしてゆくための、参加者と医学部との有意義なコミュニケーションの機会としての役割を果たすことが期待される。

4 保健医療学部オープンキャンパス

保健医療学科は看護学科、理学療法学科、作業療法学科の3学科があり、学部のオープンキャンパス委員長を中心に各学科から選出される委員各1と合計4人でオープンキャンパスを企画し開催している。内容は各学科の委員が各学科に持ち帰り検討し決めている。各学科では、学科の特徴を基に体験を中心とした内容で開催している。少子化の今日、高校卒業生が全員大学に入学できる等といわれている昨今、札幌医科大学にできるだけ優秀な人材が入学してもらえようという興味ある内容を考えオープンキャンパスを開催している。

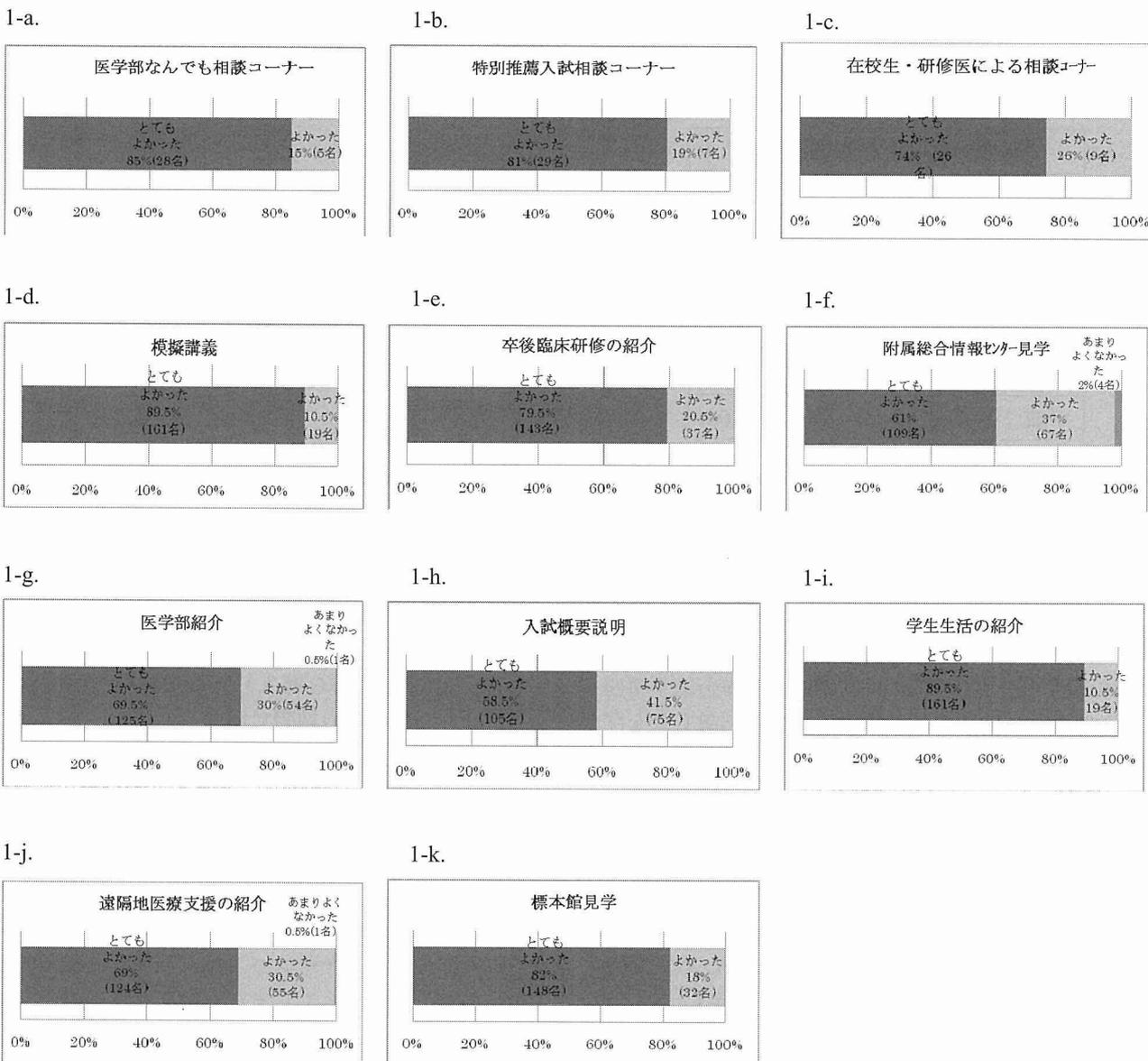


図1：2009年医学部オープンキャンパス当日アンケート結果（抜粋）（平成21年8月4日（火））

各プログラムへの評価を示す。回答者180名、回収率90%。相談コーナーは利用者が参加者の内の一部のため、回答数が大きく異なっている。

1-a. 医学部何でもコーナー、1-b. 特別推薦入試コーナー、1-c. 在校生・研修医の夜相談コーナー、1-d. 模擬講義、1-e. 卒後臨床研修の紹介、1-f. 附属総合情報センター見学、1-g. 医学部紹介、1-h. 入学概要説明、1-i. 学生生活の紹介、1-j. 遠隔地医療支援の紹介、1-k. 標本館見学

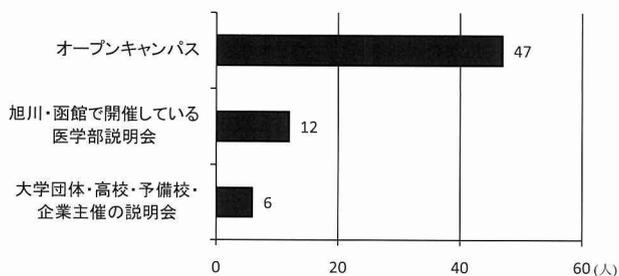


図2：2009年度入学者アンケート結果（抜粋）（平成21年4月6日（月））

回答者103名（男子77名、女子26名）：「参加した説明会を教えてください」という問いへの回答（複数回答可）

4-1. 保健医療学部のオープンキャンパスの内容

(1) 開催時期

本年度の実施は2009年8月5日と8日である。保健医療学部は、2007年まで年1回8月上旬に開催していた。しかし2008年からは年2回開催するようになった。

昨年から8月上旬に2回開催し、その内容は、午後1時から3学科共通の説明会を基礎臨床棟の講堂で40分実施し、その後保健医療学部棟に移動各学科のブースに移動してもらった。図書館および標本館の見学は、時間を決め希望者のみを案内した。参加者が参加しやすいように、3学科がそれぞれの学科の教室

でブースを開催する形態をとった。

(2) プログラム

1) 三学科合同説明会

12時に受付し13時から保健医療学部学長挨拶(10分)、各学科の特徴の紹介(各学科長10分)、入試制度の説明(10分)が行われた。ここでは、北海道の地域保健医療をになう意欲ある人に入学してほしいことを説明されており、参加者も真剣に聞いていた。地域医療をになうためのチームワークを育てるために三学科合同の講義を行っていることを紹介していた。各学科の紹介は、看護、理学、作業学とはなにか、カリキュラム、実習の大切さなどを説明していた。

2) 看護学科

看護学科では、保健医療学部棟の1～3階を使用してブースを開催した。看護学科1、2年生が学ぶ内容については基礎看護講座、3学年が学ぶ内容は成人・老年講座、母子看護講座、4学年が学ぶ内容は精神看護、地域看護講座、看護管理が担当した。その他に教員および在校生による相談コーナーを行ない、その内容は以下のようである。

- ①基礎看護講座は「人の動きを援助しよう」「いのちの音を聞いてみよう～呼吸音・心音・腸音をきいてみる～」を行った。「人の動きの援助しようでは」寝ている人を安楽に動かす方法を実際に行い、こんなに感嘆にできるんだと感激し、「いのちの音を聞く」ではモデル人形を使用し心音、呼吸音、腸音を実際に聞いてみていた。
- ②母子看護講座、成人・老年看護講座の母子看護では、「赤ちゃん人形の抱っことおむつ交換」「赤ちゃん人形の心音と呼吸音を聞いてみよう」では、赤ちゃんを抱っこして「こんなに重いんだ」「おむつの取り替えはこれでいいのか」「赤ちゃんの心臓の音はこんなに早く大丈夫なの」などと真剣に行っていた。成人・老年看護では「ソフト食と栄養補給食品の試食コーナー」「認知症テストコーナー」「嚥下モデル展示」「演習風景のパネル展示」で老人になった人たちが食する食物を試食し「以外においしい」「こんなものを食べるんだ」、認知症テストでは「認知症ではなく安心した」「老人体験」では、「視野がこんなに狭くなるんだ」と老人への理解が少し深まった様子が見られた。
- ③看護学科4年生が学ぶ精神看護、看護管理、地域看護のブースが開催された。精神看護では「アルコールパッチテスト」を行い、「お酒は飲めるほうだ」「まだ20歳前なお飲めないね等」とはなされていた。看護管理では「エラーを防ぐコミュニケーション」で演習を行い、これは普段の生活で利用できると真剣に取り組んでいた。地域看護では「生活習慣病を

予防しよう」では、学生のインストラクターとともに手軽なエクササイズを実施し楽しんでた。

- ④在校生および教員による相談コーナーでは、「受験勉強をどのようにしたらよいか」「いつから受験勉強をはじめたらいいのか」「大学生活はどんなことをするのか」等自分が知りたいことを気軽に聞いており、親は入学金や生活費などを聞いていた。

3) 理学療法学科

理学療法学科は、保健医療学部棟4階で体験学習、模擬講義、体験コーナーを開催している。その内容は以下の通りである。

①体験学習「片マヒってなに？」

片マヒについて講義のあとに、マヒの経験をして、こんなに大変なことなんだと実感し、このようにマヒのある人に持っている能力と失われた能力を活かし生活できるように支援することが理学療法士の仕事であることを理解していた。

②模擬講義「脈拍ってなに？」

普段なにげに触っている脈拍に関する講義を聞き、実際に触りその意義を理解し、驚いていた。

③体験コーナー

「内臓脂肪ってなに?」「筋力を測ってみよう」「身体に自由と不自由を考えよう」「理学療法の仕事」について参加者が実際に体験し、こんなことを勉強するんだと理学療法学科の学習を理解していた。

④学生生活紹介

在校生がパワーポイントにより入学から卒業までの状況を説明し、なにが大変で、楽しいことはなにかなど高校生と交流が深まっていた

⑤相談コーナー

受験に関すること、理学療法士とはどんな職業かなど、受験生や親から質問されていた。

⑥DVD放映

「理学療法の仕事」では、本年3月にテレビで本学の理学療法学科について紹介されたものを放映した。

4) 作業療法学科

作業療法学科は、模擬講義と体験コーナー1、2、学生生活紹介、相談コーナーを開催した。その内容は以下の通りである。

①模擬講義「精神障がいのリハビリテーション」

作業療法は精神障がいを持ち社会生活に適應できるように支援するために、いかにするかについての講義を聴き、自分には関係ないかななんて思った人もいた様子であった。

- ②体験コーナー1は「眼で見る記憶と耳で聴く記憶の違いの体験」「パソコンを使った書字・描画検査の体験」「STEFによる上肢機能測定コーナー」を

体験し、視覚と聴覚での記憶の違いについてのわかり驚いたと話し、パソコンでの書字・描画検査を実際に体験し新しい発見ができたと言を輝かしていた。STEFによる上肢機能測定コーナーでの自分の機能をこんなにして測定できるんだと関心していた。

- ③体験コーナー2は、「生活を支える機器に触れてみよう」「利き手交換コンテスト」「学生生活紹介」「相談コーナー」であった。生活を支える機器に触れてみようでは、マヒがある人が食事に使用する食器やフォーク、スプーンを手に触れ、自分の祖父母のことを考えていた。利き手交換コンテストでは思いようにいかない手に、何気なく使用している手の動きがこんなにありがたいものなのか、作業療法でこんなことを学ぶのかと感心していた。学生生活紹介では在校生が入学から卒業までどんな生活を紹介します、学習の楽しさだけでなく厳しさもあることを理解していた。相談コーナーでは、作業療法学科を受験するには、どんな勉強をいつからしたらいいのか、卒業後の就職先はあるのか等と進路を決定する参考にしていた。

(3) 参加者数

保健医療学部では、8月5日と8月8日の参加申し込み者数がそれぞれ239名と同数であった。オープンキャンパスの参加人数は、看護学科286人(1回目127人、2回目159人)、理学療法学科142人(1回目78人、2回目64人)、作業療法学科50人(1回目34人、2回目16人)であった。参加学年は、看護学科は3年生46%、2年生約40%、理学療法学科は、3年生36%、2学年46%、作業療法学科3学年41%、2学年53%であった。男女比はおおよそ1:5である。

4.2. 保健医療学部アンケート集計結果

オープンキャンパスの参加者へのアンケートの回収率は83%である。保健医療学部においても、本学のオープンキャンパスを知ったきっかけは、約半数がインターネットからであり、高校での掲示や先生からの

表2：保健医療学部オープンキャンパスアンケート調査(抜粋) 2009年8月5日実施分
各プログラムについて、参考になったかどうかを問うた設問のうち、自由体験プログラムに対する回答

	かなり参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった
看護学科	78.8%	21.2%	0.0%
理学療法学科	54.9%	45.1%	0.0%
作業療法学科	76.5%	23.5%	0.0%

紹介が、それに続いていた。

参加した内容の参考度については、すべての内容についてどの学科も「かなり参考になった」「参考になった」を合わせると95%以上で、参加者は体験を通して理解し、満足できていた様子が伺われた。

保健医療学部では例年各学科とも、自由体験コーナーへの評価が高い。2009年度第一回(8月5日)のアンケート結果を表2に示す。いずれも「かなり参考になった」と「参考になった」を併せると100%が参考になったと答えている。

自由回答のところでは、体験学習では、人数が多くて待つ時間がかかったがどの学科にもみられた。しかし体験を通して学科でどのようなことをするのか理解でき良かったが多かった。

4.3. 考察

保健医療学部では2008年度におけるオープンキャンパスは7月19日と8月6日に実施された。この際、参加人数が7月は少なめで、8月に集中したが、2009年度は二回とも8月になってからの行事となり、それぞれ同数の参加があった。夏休みなど、受験希望者たちの予定とうまくかみあったものと考えられる。

また今年度から参加者が行きたい所を探していけるようにし、保健医療学部棟で行ったことで、自分がみたい学科だけでなく他の学科にも参加できていた。体験コーナーを中心に、参加者が体験を通して各学科を理解できていたことは、知識だけの理解以上にこの学校の印象を強め、早い時期から目標を定めた行動が取れることとなったのではないと思われる。参加者は高校2学年が約半数を占めており、オープンキャンパスは大学受験の参考になることが推測されることから大学の準備についても、高校2学年が理解できるような内容が重要であり、現在実施している内容についても検討することが必要と考える。

オープンキャンパスについては、大学の普段の状態を理解してもらうことが大切なことであり、期間を決め説明会を行うことと同時に、常に誰が見に来ても良いような期間を設けることも検討する必要があると考える。

5 総 括

高校卒業生数は、平成4年にいわゆる「第二次ベビーブーム世代」としてピークを迎え、その後減少を続けている。このような中、文部科学省の調査によると平成20年度は前年と比べて、大学への入学者が約1%(6千人)減少したことが報告された²⁾。本学においても優秀な学生を確保するために、これまで以上の努力が必要とされていることは論を待たない。

近年の受験生の傾向として、景気悪化の影響もあり、地元志向が強まっていることが指摘されている^{2,4)}。地元志向の上昇には賛否両論があるが、地域医療への貢献を大きな柱とする本学にとり、地元根付く可能性が高い学生を確保することにつながることも考えられる。

いずれにしても、地元（北海道内）からの受験生にとって、オープンキャンパスは実際の大学にふれる大きな機会である。本校においても、両学部とも参加者の90%以上が北海道内の高校からである。

本学新入生に対して入学時に行ったアンケートによると、医学部では例年40%以上新入生が本学のオープンキャンパスに参加していると答えている。また2010年度に初めて行われた保健医療学部推薦入試において、受験生に対して行ったアンケートにおいて「志望校を決定するにあたり、何が一番参考になりましたか」の問いに対して、オープンキャンパスと答えた受験生が最も多かった（図3）。もちろん他の広報活動の重要性が低いとは考えられないが、受験生、あるいは将来医療の道に進むことを希望する高校生が、直に本学の施設を訪れ、空気に触れることは、彼らのモチベーションを上昇させる最終的な原動力になっているのであろう。全国的にも、高校の受験生に対する動機付け強化行事としてもオープンキャンパスが上位にランクされている³⁾。

内容に関してはいずれの学部においても、模擬講義と、在校生の「なまの声」に対する評価が高い。医学部では卒後臨床研修の紹介に対する評価も高くなっている。年齢的にも近い在校生の意見が、受験希望者達の興味あるポイントとマッチしていることがうかがわれる。自由記載でも、在校生の話が聞けたことに対して、良い反応を得ている。

今後、受験生の参加を促すには、開催時期の工夫やプログラムの吟味などが不可欠であるが、情報がイン

ターネットによるものが多くなっている現状で、本大学もオープンキャンパスの情報を今までのように6月頃に更新するのではなく、新学期が開始すると同時に更新することが、より適切な情報提供につながると考える。

引用文献

- 1 文部科学省「学校基本調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より
- 2 平成20年度学校基本調査（確定値）調査結果の概要（高等教育機関）(http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/002.pdf)
- 3 河合塾「大学全入時代における戦略的な入試広報」基礎資料より、河合塾、2007.
- 4 ベネッセコーポレーション2009年入試結果説明会「前年度入試結果分析ならびに本年度入試の動向予測」資料より、部寝せコーポレーション、2009

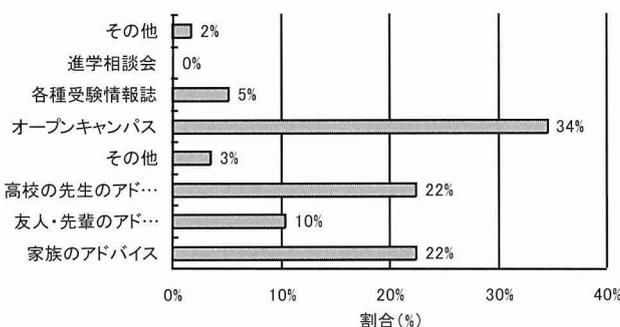


図3：2010年度保健医療学部推薦入試におけるアンケート調査（抜粋）
「志望校を決定するにあたり、何が一番参考になりましたか」に対する回答